

Café des open



三浦一族

Menu 第2回

三浦氏と北条氏

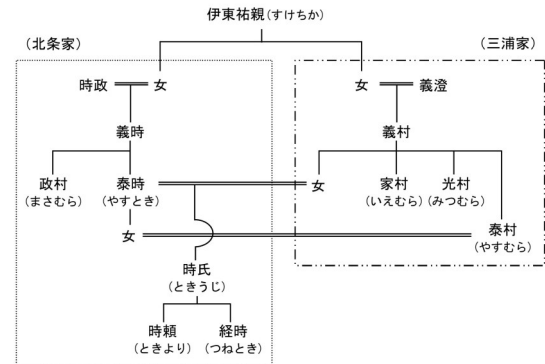
文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

現在放送中のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」では、主人公北条義時と三浦義村は盟友として描かれています。彼らの父である北条時政と三浦義澄は、いずれも伊豆の豪族伊東祐親の娘を妻としていたとされ、その子である義村と義時は従兄弟の関係にありました。今回は、三浦氏と北条氏の関係について、紐解いてみたいと思います。

両氏関係を具体的に示唆するエピソードが鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』に記されています。仁治2年（1241）11月29日の午後、若宮大路の天下馬橋（しものげばばし）（現 下馬四ツ角）付近で、三浦一族と小山一族（関東北部を拠点とした豪族）との喧嘩があり、双方の縁者が集結し、一時現場が騒然となる事件がありました。その日、三浦泰村・光村・家村以下兄弟親類が天下馬橋西脇の遊女がいる店で酒宴をし、東脇では結城朝広（ゆうきともひろ）ら小山一族が遊興をしていました。そうしたなか、朝広の弟の朝村（ともむら）が席を立ち、笠懸（かさかけ）（馬上から遠距離の的を射る競技）のため由比ヶ浜に向かいます。その途中、犬が出てきたため、射たところ、矢が誤って三浦一族の酒宴の中に入ってしまいます。朝村は従者に命じて矢を返すように求めますが、対応した家村は返すことはできないと言い張り、喧嘩となったのでした。騒ぎを知った3代執権北条泰時は、すぐに使いの者を派遣して騒ぎを鎮め、当事者であった家村と朝村に譴責を行い幕府への出仕を停止させました。しかし、この時、喧嘩の当事者ではない人物も一緒に処分を受けていました。その人物こそ、泰時の孫で、後に4代執権となる北条経時です。経時は騒ぎを聞き、配下の者に命じて武具を持たせ、三浦方に遣わしました。これを聞いた泰時は、一方の側を支援した経時の軽率な行動を譴責し、しばらく自分の前に出てくることを禁じます。その後、泰村と北条政村の取り成しがあり、12月5日には経時は赦され、また家村と朝村の出仕も認められることとなるのです。

この一連のエピソードで注目したいことは、経時が三浦方に肩入れしていた点と経時の処分解除のため泰村や政村が仲介に動いていた点です。これらの行動の背景には、それまで築き上げてきた三浦氏と北条氏との密接な関係がありました。建久5年（1194）、三浦義澄は、源頼朝から泰時（当時は頼時（よりとき）と称す）と孫娘との婚姻を命じられ、その8年後の建仁2年（1202）、義村の娘が泰時のもとに嫁ぎました。この2人の間に生まれたのが経時の父で、次期執権と目されていた時氏で

【三浦氏と北条氏の関係図】



した。また、義村の子の泰村には泰時の娘が嫁ぎ、さらに政村の烏帽子親（えぼしおや）を義村、泰村の烏帽子親を泰時がそれぞれ担いました。烏帽子親とは、武家の男子が元服する際に親に代わって烏帽子をかぶらせ、烏帽子名をつける人のことをいい、実際の親子に準ずる関係性でした。こうした関係を通じ、三浦氏と北条氏は強い結びつきをもちました。つまり、先の経時の三浦方への肩入れや経時の処分解除のために政村や泰村が仲介したという話は、こうした両氏の密接な関係性を表すものだったといえるのです。

しかし、こうした両氏の蜜月関係も徐々に陰りを見せ始めます。寛喜2年（1230）6月、時氏が28歳の若さで亡くなります。さらに、同年7月には泰村の妻（泰時の娘）が女兒を出産するも女兒は間もなくして死亡、8月には、その妻も産後の悩乱で亡くなりました。この後、泰村のもとには泰時の別の娘が嫁いだようですが、この妻も嘉禎2年（1236）に没しました。

仁治3年（1242）6月、遂に両氏をつなぐ最大のハイブとなっていた泰時が亡くなります。次期執権の経時や弟の時頼（ときより）（5代執権）の母は、有力御家人安達氏の出身だったため、次第に同氏の影響力が強まり三浦氏と対立していきます。さらに、泰村の弟の光村が寵臣（ちようしん）として仕えていた前將軍藤原頼経（ふじわらのよりつね）を鎌倉から追放し帰京させたことに対する北条氏への不満も重なっていきました。

三浦氏と北条氏との緊張が高まる中、当主泰村と時頼は最後まで和平交渉を重ねますが、その努力の甲斐もなく、宝治元年（1247）、宝治合戦が生じ、三浦氏は滅亡しました。今回ご紹介したエピソードは、泰時が没する前年のことで三浦氏と北条氏との蜜月時代の終わりを迎える最後の出来事であったといえます。